

夜空の向こう側

脇川郁也

ふり返ると

紫色の空にいくつか星の光が見えた

見晴台から望む街の夜景を眺めながら

あのひとつひとつに

だれかの家庭があるんだねと

あなたはつぶやいた

なだらかな長い坂道を

ふたりで登った

いつの間にか息が上がって

そとつないだ手を引き合って笑った

明かりの数だけある家庭で

暖められる笑い声もあるけれど

時がたつと

あきらかな月の光が

いつの間にか雲にかすんでしまう

知らぬ間に闇が降りてきて

世界を覆ってしまうことがある

どれだけ手を伸ばしてみても

届かないもどかしさに

秋の風はいつも吹き来るのだ

虫が鳴いているね

あれはね、羽を擦り合わせているんだ

恋する人を呼んでいるんだ

でもそれが

哀しげに聞こえるのはなぜだろう

予約したのは

夜景がきれいなレストラン

すこし気取って

ぼくらはワイングラスを傾ける

弾けるようなグラスの音に
見つめ合って笑顔を交わした

夜空の片隅に星が流れた

遠く音もなく

光を点滅させたジェット機が

飛んで行く

ポケットの膨らみは君に贈るプレゼント

どこにも月は見えなかった